【研究ノート】

下村宏と松下幸之助の知人に関するそれぞれの回想

――幸之助研究における下村の重要性

坂本慎一

筆者は「玉音放送に至るまでの下村宏の事績と思想――松下幸之助との交流と共に」において、下村宏（号は海南）が松下幸之助を高く評価した事実を重視し、両者の交流を考察した。[1] 官僚、経営者、貴族院議員を経験した下村は、幸之助の政策提言に大きな影響を与えたと考え、一例として両者の道州制論に着目し、「松下幸之助と下村宏の道州制論――台湾総督府の州庁制と大戦末期における地方総監府制の重要性」で両者の道州制論について考察した。[2] 両者は和歌山県人会や新政治経済運動などにおいて親密な関係にあった。[3]

幸之助は自身の事績について多くの回想を残しているが、重要な人物であるにもかかわらず、ほとんど証言を残していない例も散見される。たとえば、昭和一五（一九四〇）年、幸之助は平田東助伯爵の家から正治を婿養子として迎えるが、平田家との関わりはあまり述べていない。和歌山県人会の先輩である栗本勇之助に関する回想も非常に少ないと言ってよい。

下村と幸之助には共通の知人が多く、なかには下村が幸之助に紹介したと思われる人物もいる。下村は官界、実業界、学界、政界などの分野にも顔が利き、当時日本有数の顔の広さを誇る人物だったと言える。[4] 下村はその広い人脈を生かし、生涯において多くの人物の紹介記事を書いている。[5] 本稿では、両者共通の知人をとりあげ、幸之助の知人・友人について、本人が詳しく回想していない部分を埋めるものとして、下村による記事を重視してゆきたい。

この検証を通じて、幸之助にとって重要な人物が、しばしば下村に非常に近い人物であったことが確認できる。下村は思想的に幸之助に影響を与えただけではなく、豊富な人脈を提供し、幸之助が全国各方面に雄飛するきっかけを与えた人物であった可能性が浮き彫りになってくる。

Ⅰでは、幸之助と下村、双方に縁のあった人物についてとりあげる。考察する人物は、平田東助、荒木貞夫、野村吉三郎、栗本勇之助、堀抜義太郎である。このうち栗本と堀抜は、今日その事績を知る手がかり自体が限られている。

Ⅱでは、幸之助がしばしば言及し、かつ下村にゆかりのあった人物として、村山龍平と武藤山治をとりあげる。Ⅲでは、その他の関わりとして、佐々木信綱をとりあげたい。

さらにⅣで、今後の展望として、昭和一〇年代に下村が幸之助に

人物を紹介していた可能性について推測を広げたい。宮中、軍人、文化人、スポーツ関係、朝日新聞など、幸之助が実際に利用した可能性のある下村人脈について考察し、下村の記事の重要性について確認したい。

I 幸之助ゆかりの人物

1 平田東助、荒木貞夫、野村吉三郎

松下幸之助は、平田東助(号は西涯)、荒木貞夫、野村吉三郎について、次のように証言している。

正治の祖父の東助という人は米沢藩士の出で、明治維新のとき、実力で華族になった人ですから、なかなか偉かったんでしょうな。正治の兄貴は三井財閥の本家筋からお嬢さんをもらっています。おかあさんは加賀百万石の前田侯爵の妹さん。親類筋全部がきらびやかで、家柄がいいんです。向こうと親類の名簿をとりかわすとき、こっちは全く誰もいない。にわかに作成するわけにもいきません。ちょっと困ったなと思ったが、仕方がなかった。うつ手はおまへん。

結婚式もハタと困りました。松下側のお客さんが少ないと格好がつきませんからな。しかし、大阪と東京の二カ所で行った披露宴には、大阪では関西財界の主な面々が顔をそろえて下さったし、東京では以前から心やすくしていた野村吉三郎海軍大将、荒木貞夫陸軍大将らが列席して下さいました。戦前のことですからね。陸海軍を代表するパリパリの将軍、提督が正装してデンと座れば、それはそれはすさまじい迫力がありましたよ。だから、僕のほうもあまり見劣りはしなかったのです。(6)

三者とも、松下正治の結婚式のときにはすでに知り合いであったとしている。幸之助が平田と荒木について述べているのは、この結婚に関する回想のみのようである。平田家は婿を迎えるくらいであるから以前から深い絆があったと想像されるが、幸之助が平田家との関係を詳しく説明している箇所は見当たらなかった。

一方、野村吉三郎については、日本ビクターの社長に就任してもらった関係もあって、多くの回想を残している。たとえば次のように述べている。

日本ビクターの立て直しをするにあたって、社長をだれにするかということになったが、私がぜひお願いしたいと考えたのは、野村吉三郎さんであった。

野村さんは戦前、海軍にあって大将までつとめられた方である。さらに海軍退官後は、学習院院長、外務大臣、そして日米関係が風雲急を告げ始めた昭和十五年には特命全権大使としてアメリカに赴き、両国平和のため、いわば身命を賭して尽力された。

私にとっては、同じ和歌山県出身の同郷の大先輩にあたり、そんなことから、早くからごじっこん願っていた方である。私もこれま

での人生の中で、多くの立派な方がたに直接お会いする機会を得たが、その中でも野村さんは第一といってもいいような、一口にいって、人間の偉大さを感じさせる大人物であったと思う。(7)

野村については同郷の先輩であること、早くから入魂の間柄であったことを明言している。

下村宏は、平田東助とは近い間柄であった。明治三九（一九〇六）年四月、平田との最初の出会いについて次のように書いている。

聴き上手として先づ思ひ起さるるは故西涯平田東助伯であった。僕が逓信省から為替貯金の事務を研究すべく白耳義に留学を命ぜられ、たまたま期が満ちた時が日露戦役勃発であり、帰朝してから或る時東京帝大の講堂で白耳義の年金保険事業と労働者家屋問題といふので講演をする。更に当時国家学会雑誌にも寄稿した事がある。平田伯は此問題にふれて話を聞き度いといふのであったらしい。伯と親しく又僕の先輩である湯川寛吉君から、僕は逗子の鳴鶴荘に伯を訪ふべくすすめられた。

それが伯と最初の会見であり、爾来逗子の別荘に又駿河台の本邸に、伯と会見した事は数次にわたるが、いつも会見の後に感得した事は伯の聴き上手であるといふ事であった。(8)

この会見をきっかけにして、後に下村を中心に郵便局の簡易保険が創設されることとなった。その後の平田との会見は次のように証言している。

其後第二次の桂内閣の時であったと思ふ。多分明治四十一年か二年の頃であった。貯金事務で旅行中、時の逓相後藤子から呼び戻されて、君、一寸平田内相に遇ふて呉れ、一つやって貰はねばならぬ事があるからといふ。山下町の内相官邸に訪問すると内相から、早速だが君例の簡易保険と年金制度を実施して見たいが、法案を此議会へ提出する事が出来ぬかといふ事であった。(9)

以後、簡易保険成立に向けて下村は東奔西走するが、平田には常に報告を怠らなかったと証言している。平田家と下村の関係は、この簡易保険の創設事業によって築かれたと言える。

下村は近所の子供の名づけ親になったり、多くの仲人を務めるなど、人の面倒を見るのが好きな性分であった。(10)さらなる調査が必要であるが、下村が平田家と松下家の橋渡しをした可能性も考えられよう。

荒木について、下村は昭和七（一九三二）年に次のような記事を書いている。

政党嫌ひと思はれてゐる荒木陸相が突如政友会の森恪君の病気見舞に行ったといふので口の悪い連中が

「政党員を訪問するなんて、陸相も心境の変化を来したんですか」

と云へば陸相憤然として

「我輩が犬養内閣の陸相当時、森君は書記官長で、ともに枢機に

参与した間柄だ。軍部と政党と対立してゐるような噂があるからと云って、友人として踏むべき道を踏むに何の遠慮がいるか」
と一流の訓戒兼弁解をするところは如何にも荒木陸相らしい。[11]

この記事から、荒木が派閥や党派にこだわらない自由な人物であったことをうかがうことができる。学歴も家柄もない松下家の結婚式に荒木が出席した理由の一つは、荒木が派閥などの形式にこだわらなかったからだと分かる。

また野村については、下村は昭和七（一九三二）年に会った記事を書いている。野村が上海事変で片目を喪失したので、病室へ見舞いに行ったとして、次のように書いている。

軍人の貫目はその沈勇なるにある。片目になって益々沈勇となるなど亦妙なりである。中将の眼の傷には耳の後の肉をそいで、けづり取られた瞼を継ぎ合した位であるから、無論昔日のおもかげ通りといふわけにはゆかない。然しそんな事などかれこれ贅沢は言って居られない。左の眼のふちにも未だ二ヶ所ばかり弾片が残ってゐる、わづかな相違で左眼も失明するのであった、ヤレヤレ危ない事である。軍人が戦場に出る、もとより命は投げ出されてある、命の無くなるのは未だ忍ぶべし、不具者となって生残り、殊に両眼共その明を失するなどはやりきれたものではない。中将はこれを見てくれと寝衣を脱いだ。六尺近い将軍の巨躯には、切られ與三郎は三十四ヶ所の刀創と言ふが、これは又百六十餘ヶ所の弾創がある。受けた弾創の数では当時の遭難者中、将軍は一番多かったそうである。愚痴や註文をつけだしてはきりがない。独眼龍ですんだ事はまあ何よりである。それは野村将軍一人の喜びだけではない。[12]

また昭和二（一九二七）年にも次の記事を書いている。

（六月）二十五日国際連盟協会の評議会がある。食後野村軍令部次長の軍縮問題につき講演をきく。此問題は毎日新聞でやれ、巡洋艦がどうの、駆逐艦がどうの、潜航艇がどうの、速力に噸数に砲径に仰角に、色々と註文がコングラかへり素人に分らぬ事夥しい。[13]

記事から受ける印象では、昭和二（一九二七）年の段階では必ずしも親しい関係とは限らず、昭和七（一九三二）年になるとすでに親しくなっていたようである。[14]

下村が松下電器を取材したのは昭和九（一九三四）年であるが、幸之助は、野村とは昭和八（一九三三）年頃に最初に会ったと述べている場合と、[15]昭和一〇（一九三五）年頃に「ある人に紹介され」、野村と初めて会ったと言っている場合がある。[16]

2　栗本勇之助

栗本勇之助（号は木人）と松下幸之助の関係は、ナショナル証券顧問などを務めた、和歌山県出身の松永定一が次のように述べている。

松下幸之助氏には昭和一二年、私が大株一般取引員だったときに初めてお目にかかった。当時「木友会」という紀州出身者のつどいがあった。現大阪財界の長老、栗本順三氏（栗本鉄工所特別顧問）の岳父、栗本勇之助氏（同社創業者）らが中心になっていたが、「もそっと若手の会員を」とのことで、松下氏、田村堅三氏（元日本弁護士連合会副会長）、小山省三氏（大日金属工業会長）と私とが入会したものだった。

松下氏はこのとき確か四三歳、松下電産の資本金もすでに一〇〇〇万円、従業員数は五〇〇〇人を数え、日本の代表的電気機器メーカーとして業界に君臨していた。

初めて会った松下氏には不思議な威圧感が感じられたが、接してみると誰にも親しみやすく聞き上手との印象を強く受けた。

ちなみにこの木友会は戦後、氏の肝いりで「音無会」として再生、木の国紀州産の、そして反骨精神の強い巨材、逸材が多く、最近では証券界の児玉冨士男氏（和光証券会長）らが参加された。[17]

栗本が主宰する木友会は、幸之助が事実上相続して、戦後に音無会となったと松永は述べている。栗本の活動を引き継いだのであるから、幸之助にとって栗本の存在は決して小さくなかったはずである。

しかし幸之助本人による栗本についての回想は少ない。たとえば次のように述べている。

私は北海道へ参りましたのがこれで三回目でございます。最初はちょうど日支事変の始まった頃であります。当時大阪工業会の会長であった栗本勇之助さんという人が、北海道に非常に興味を持っておられまして、大阪の経済人を10人ばかりつれて、北海道へ視察旅行に来られました。当時、小僧でありました私も「松下、おまえも来い」といわれて参ったのでございます。ちょうどこのホテル（グランド・ホテル）ができまして間もない時でございました。私はまだ見ない北海道に憧れておりまして、北海道は相当に寒い国だ、というようなことで来たんでありますが、着いてみまして、こんな立派なホテルがあるのかと、ちょっと意外に思ったことが今も記憶に残っております。[18]

また昭和五四（一九七九）年当時、栗本鉄工所社長であった平野順次の本に、幸之助は次のような序文を寄せている。

平野さんは、経営者としてまた人間としてきわめてすぐれたかたである。

私は、創設者の栗本勇之助さんとの関係もあり、つい最近まで栗本鉄工所の役員をお引き受けしていたので、経営者としての平野さんをよく存じあげている。また、平野さんも私も、ともに和歌山県の出身で、和歌山県人でつくっている〝音無会〟という会の会員であることもあって、個人的にも友人として親しくおつきあいいただいている。[19]

以上から、栗本から見れば幸之助は「小僧」だったとのことである。

しかし今回の調査では幸之助がこれ以上詳しく栗本について述べている例が見つからなかった。栗本も、平田家と同様に、重要な関係にありながら幸之助がほとんど語っていない人物の一人であると言える。また、栗本は、その事績について、今日知る手がかりが非常に少ない人物である。

下村宏と栗本は大学時代の同級生であり、[20]二人が中心となって和歌山出身の帝大生と一高生で、和歌山城の別称である「虎伏城」にちなみ、「虎城同窓会」を作った。当初の会員は一〇人ほどで毎月ほとんどの会員が出席したと述べている。その後、日清戦争の頃に、旧藩主であった徳川頼倫を総裁、男爵川口武定を会長として、さらに和歌山学生会をもり立てた。[21]後年には、関西では栗本を中心に木友会、東京では下村を中心に紀友会が運営された。

その他にも大学時代は二人でよく吉原へ遊びに行ったと述べている[22]が、大学卒業後の栗本について、下村は次のように紹介している。

彼は大阪で検事を振り出しにいくばくもなく弁護士になった。彼はいつも時間をたがえる、約束を反古にする、一言にしていえばズボラである。上方でいうジュンサイである。そうした彼が弁護士になっても誰一人頼み手も無いはずだが、先生はいつもお茶屋に浮かれているところを見ると依頼するお客があると見える。医師と弁護士は何よりも信頼される事が第一義だ。さりとて世間は広いものやなァと不思議がっていると、いつの間にか栗本弁護士は紀野鉄工所の法律顧問から工場主となり栗本鉄工所長となった。

栗本鉄工所はいずれは遠からず御破算かそれとも看板の名はぬりかえられる事と懸念していたが、順風に帆をあげてゆく。或友人は鉄の事業にたずさわる者はどうしてもさらにさらに大きく発展すべきはずである。それほど発展しないところに木人のヨサがあるといった。木人の性格は一鉄工場の主人たるべくあまりに大きい。彼は現実をはなれさらに大所高所に遊離していた。彼は国策研究会の大阪支部では、岡野清豪、小幡源之助、岸本彦衞、北沢敬二郎、和辻春樹、古野孝一、飯島幡司等々の諸氏と共に活躍し、経世の議論を口にしつづけた。[23]

続いて下村は栗本の娘婿である順三が大阪市の助役を務めながら鉄工所も運営しているとか、大阪商工会議所に出席した労働運動家の西尾末広が、もっとも理想的な労使関係は栗本鉄工所だと述べたとか書いている。西尾は社会党の書記長や後に芦田内閣の副総理も務めたが、下村は西尾の話として、労働組合の集会に栗本が出席して壇上に立ち、労働組合から表彰を受けるべき人物は私だと言って場内を驚かせた逸話を紹介している。労働組合と経営者が温厚な関係を築くのは松下電器も同じであるが、自らを「小僧」と認める幸之助にとって、栗本の経営手腕はお手本の一つだったのかもしれない。

また、飯島幡司は初期の『PHP』誌に、幸之助に次ぐほどの回数で寄稿しており、初期PHP運動において重要な人物であるが、飯島

は「松下さんとは紀州出身の先輩を通じて知り合いになった」[24]と証言している。下村と飯島は共に朝日新聞で勤務し、昭和九（一九三四）年に『遍路』、昭和一〇（一九三五）年に『南遊記』といった共著も出版している。飯島が言う「紀州出身の先輩」とは、下村か栗本のどちらかではないかと考えられる。

3　堀抜義太郎

松下幸之助が堀抜義太郎について回想している場合は、江崎利一らと「文無し会」を運営したという話と、終戦直後に借金をしたという二つに限られているようである。前者については、江崎利一との関係を述べる際、次のように回想している。

> これからも二人で時折会って話をかわしたいということから、定期的に会合を開くことにして、これに「文なし会」という名前をつけました。二人とも、それこそ一文なしの状態で事業を始めたのだから、ということによる命名でしたが、これには後に四人の方が加わりました。それは、サントリーの創業者である鳥井信治郎さん、中山製鋼所を始められた中山悦治さん、京都で重工業に成功された寿工業の常田健次郎さん、そして帽子では日本一になった堀抜帽子の堀抜義太郎さんの四人でした。
>
> みな、いわゆる徒手空拳から身を起こした、同じような経歴の持ち主ですが、業種が異なる気安さもあって大いに意気投合し、当時のお金で一万五千円という相当高額の入会金をとって万一のときの資金とすることにしたり、毎月、大阪の大和屋というところで会合を開き、商売のことについてそれこそ恥も外聞もなく、実情をさらけ出して語りあったりしたものです。この会合は、次の機会が実に待ち遠しい、ほんとうに楽しいものでしたが、そのうち戦争が始まって、中止せざるを得ないようになりました。
>
> そして戦後、世情もようやく落ち着いて、文なし会が再開できるようになってくると、まずいちばん若かった堀抜さんが亡くなられ、ついで中山さん、鳥井さん、常田さんもこの世を去られて、十五年ほど前からは江崎さんとぼくの二人にもどってしまったのです。[25]

終戦直後の借金については、次のように述べている。

> 私の個人的な生活状態はどうであったかというと、先にも述べたように、私は財閥指定を受けて以来、資産はすべて凍結され、毎月の女中さんの給料まで、進駐軍のゆるしを得なければ払えなくなっていた。私の生活費は、当時の公務員のベースに従って規定され、その範囲内での予算と実績を進駐軍に報告しなければならなかった。
>
> しかし、一社の社長としてこれでまかなえるはずがない。かと言って資産はすべて凍結されているから売り食いもできず、毎日の生活にも次第に事欠くようになっていた。
>
> やむなく親しい友人であった中山悦治氏、堀抜義太郎氏、鳥井信治郎氏などに月々の生活費を借りてまわらねばならなかった。それ

ぞれに当時の金にして十万円近い借金をしたであろうか。[26]

この堀抜は一般的に事績が紹介されることは少なく、今日となっては知る手がかりが限られている。

下村宏は数少ない堀抜の記事を書いた一人である。昭和一二（一九三七）年三月、下村は兵庫県六甲山麓の自宅・海南荘を手放し、東京の田園調布に転居した。海南荘を買い取ってくれた堀抜について、次のように書いている。

A　一体その引き取ってくれる人といふのは誰なのかね？
B　堀抜義太郎といふ人だよ。
A　聞かない人だね。
B　僕も実は初めてなのだよ。この間、海南荘惜別の宴に五十名ほど来客が集まったが、この引継の仲介をしてくれた勧銀の田辺加太丸君の外は誰も知らないのだよ。
A　どうした人かね？
B　伊丹の製帽工場の主人だよ。
A　製帽？
B　驚くなかれ、今一日に七千五百打（ダース）つくり上げてる。七千五百ぢゃない、打だよ。
A　ダアスですかい。ソリャ大変だなあ！[27]

この記事は昭和一二（一九三七）年、雑誌『経済知識』の六月号に記載された。同年の『主婦の友』六月号も下村に取材をし、堀抜について聞いている。

下村先生は、田園調布のお宅で、……語られるのであった。
「君、この堀抜といふ男は偉い男だよ。教育は一つもないが、日給七十五銭から叩き上げて、今ぢゃ世界の堀抜だよ。こんど妙な縁から僕の海南荘を引受けて貰ったんだが、それまでは聞いたこともなかった。前から僕のファンだったらしいが、会ってみると実に偉い男だね。今、日本に製帽会社は二十くらゐあるが、製造高は堀抜一件だけで外の全部を合はせた数より多いんだから驚くよ」
「その人は今幾つなんですか？」
「まだ四十二か三だらうね。とにかく今、旭日昇天の勢で伸びてゐるからどこまで大きくなるか判らんね。君、一度会ってみ給へ、ずゐぶん苦労もしたらしいが、ああいふ人の話を聴くと、毎日下積みで、ウダツが上らんと思ってゐる人には大きな力になるよ」[28]

続いて、この記事は昭和一二（一九三七）年当時の堀抜製帽のデータを掲載している。

資本金百万円の株式会社、職工千五百人。
昨年度全国輸出量百二十万打、堀抜帽体輸出量百十万打で、全体の九割以上に当る。
昭和三年の堀抜帽体一ヶ月の生産高は千二百打、十年後の現在は

一ヶ月十五万打で、正に百二十五倍の展開である。他十六社を合計しても堀抜一社に及ばざること五万打。

尚ほ堀抜帽体は三年計画で、一日一万一千打、一年五千万円輸出を目論んでゐる。

これが日給七十五銭の職工から出発した、四十二の無教育な男の事業の全貌である。[29]

「帽体」とは帽子の原型であり、帽体にその時々の流行の装飾を付けると完成した帽子になるという。

さらに記事は堀抜の半生を紹介している。堀抜は三重県の貧しい農家に生まれ、数え年六歳で母を、一一歳で父を失い、小学校を五年で退学して、一三歳の春に大阪の薬屋へ奉公に出た。やがてメリヤス屋へ転職するが、一九歳でメリヤス屋が倒産し、日本帽体製造所の職工となった。大正七（一九一八）年、二三歳で摂津フェルト会社へ転職し、ここで日給七五銭の生活をおくった。当時は未曾有の物価高のため三度の食事に七二銭が必要であり、堀抜は食事を二度に減らしつつ、本職の他にメリヤスの夜店を出して窮地を凌いだ。

二四歳で事務長兼工場長に抜擢され、月給は一〇〇円になった。二七歳で結婚し、昭和二（一九二七）年、一五〇〇円の資本と七〇〇〇円の借金により、七二坪の工場と三二名の職工で堀抜帽子製作所を創業した。工場は順調に発展し、昭和九（一九三四）年三月には高松宮妃の視察を受けたという。

下村によれば、海南荘を手放すとき、堀抜は「器具家財も差支なくばそのままに残して下さい、海南荘として保存しませう、先生いつでも来て泊って下さい」[30]と言った。朝日新聞の飯島幡司は大阪中から石を探し、海南荘に下村の歌碑を建立した。今日、海南荘は解体されて分譲住宅地となっており、歌碑は苦楽園四番町公園に残されている。歌碑の表には「眼ざむれば松の下草を刈る鎌の音さやに聞ゆ日和なるらし」という下村の歌がきざまれ、裏に「昭和十二年四月堀抜義太郎建之」と記されている。

堀抜と下村は昭和一二（一九三七）年頃知り合いになり、下村と幸之助の初見は昭和九（一九三四）年である。幸之助が堀抜とどのようにいつ知り合いになったのかは不明である。

Ⅱ 松下幸之助がしばしば言及する人物

1 村山龍平

松下幸之助は、朝日新聞の創業者、村山龍平（号は香雪）について、昭和九（一九三四）年、次のように述べている。

さきに亡くなられた大朝（大阪朝日新聞）の村山龍平氏は、新聞経営者として日本のみならず世界的に有名な人物であった。氏が大朝創刊以来今日の大を成すまでには、ひとかたならぬ努力がはらわれているが、またそれによってわが国文化のために貢献されたところは非常に大きい。

氏は一人一業主義を徹底的に奉ぜられていた人で、かくのごとき大新聞の職にありながら、新聞経営以外の事業には全然関与されず、いろんな方面からの投資あるいは重役就任の勧誘も、すべて拒否されていた。これは、氏が新聞経営をば自己畢生の事業と定め、それに全生命を打ちこんでおられたからであると思われる。(31)

戦後になると幸之助はＰＨＰ運動を開始し、月刊誌『ＰＨＰ』を創刊した。『ＰＨＰ』誌を編集する者の心構えを述べる際、村山について次のように言及している。

今、朝日新聞は皆さんもご承知の通り、新聞としては非常に偉大な新聞になってますが、あれを創刊した当時の、村山龍平氏の日常の生活態度といいますか、業務態度というものは私はこの目で見てるわけではありませんから、的確にどうであったということは言えないのでありますが、これは私の想像でありますけども、村山龍平氏はおそらく一人で編集し、一人でそれを販売し、一人で金の工面もしてやっていったんやないかと。そうでありますから、すべて一人でやったと。したがって、編集は立って編集すると、いうようなことでですね、ちょっと散髪屋さんの格好をしてるように腰かける間がないと、そして一日を暮らしたと。そして、その新聞がようやくできたと。それを自分でまた配達するというような、言わば、極端に言えばそういう状態やなかったかと思うんです。あるいは初めから三人か四人の人がかかっておったかもしれませんけども、みんながそういう姿であったと。立ちながら仕事をしておったと、立ちながらものを考えておったと。まあ、腰掛けて、まあ、コーヒー一杯飲んで、そして編集の文句を考えてると、そういうようなことが決してなかったんやないかという感じがするんです。それが今日の朝日新聞をなしたんやないかという感じします。(32)

創業当時の村山について、直接見たわけではないと述べつつも、その様子を想像して説明している。恐らく村山とは会ったことがあるとしてもそれほど懇意にしていたわけではないと思われ、一度も会っていない可能性も考えられる。しかし、経営者としての村山を評価していたことは間違いないようである。

下村宏は村山に請われて朝日新聞に入社し、大正一〇（一九二一）年から昭和一一（一九三六）年まで東京朝日新聞の経営のほとんどを任された。『朝日新聞七十年小史』は下村の貢献について「大正の末年から昭和の初期までの間に、わが社が行った制度と機構の改革は主として下村の献策によるもので、特に東京朝日には大に力をそそいだ」(33)と紹介している。それまで村山と上野理一による個人の経営の色彩が強かった朝日新聞に「経営の近代化」をもたらしたのは下村であった。これは村山が望んだことであり、村山自身も「朝日新聞は村山の新聞じゃないぞ」と述べていたという。(34)

しかし、この改革は村山・上野家から権限を奪う行為にも見え、ともすれば社の内外で誤解を招きかねないものであった。そのため、下村は改革と並行して、村山や上野の功績を称揚し続けたのである。今

日伝えられる「村山伝説」や「上野伝説」の多くは、下村が中心となって流布させたものと考えてよいであろう。幸之助の考える村山像もまた、下村による宣伝の影響を受けているはずである。

下村は村山について次のように書いている。

村山香雪翁は進取の人であり、果断の人であった。

紀州家の家老勢州田丸の城主久野丹波守の勘定方であり国学者であった村山守雄氏の嫡子龍平氏は、父と共に大阪に出て、剣を捨て算盤を取り舶来屋を営み、ランプやインクの売り弘めに苦心したのも、次で明治十二年から大阪朝日新聞を経営したのも、すべて故人の進取の気象の発露に外ならぬ。新聞は大衆的であるべしとて振仮名付にする、小説を掲げる、マリノニー輪転機を求める、振仮名付活字をつくる、マース氏を招聘して飛行を試みる、武石浩玻氏の三都飛行、ナイルスの宙返り飛行、グラビヤ版、東西定期便、訪欧飛行、曰く何、いづれも進取のトップを切ったもので、それらは万人周知の事実である。[35]

さらに村山には熟慮するところもあれば、決断すると一気呵成に事を進めるところもあると紹介している。

その他、『下村宏博士大講演集』では扉に「此の書を村山龍平翁にささぐ――海南――」と記している。[36] 村山について詠んだ和歌も多く、大正一五（一九二六）年四月、村山の喜寿に「朝日匂ふ　御影の里の櫻花　はな咲きみてり　君ことほぎて」と詠み、[37] 八〇歳の誕生日には「八十坂を　のぼりてつきず　この山の　櫻さきみち　朝日にかがよふ」と詠んでいる。[38] 村山死去から五〇日後、大阪市阿倍野において「村山香雪翁五十日祭」が開催されたが、その際も五つの和歌を詠んでいる。[39]

もっとも村山については「故人より受取りし三十通に近い書状をくりひろげて、そぞろに追憶を新にするものあれども、その多くはここに筆にすべき筋合のものでない」と書くなど、[40] 社長と副社長の関係にあって、知りすぎているがゆえにかえって紹介記事が書きにくい面もあったようである。

2　武藤山治

松下幸之助にとって武藤山治は大阪財界の先輩であった。幸之助が武藤について言及するのは主に松下政経塾設立の動機について説明するときであり、武藤も政治改革を志したが失敗したので、政経塾設立の際に周囲が反対したという文脈で名を出すことが多い。幸之助は武藤について次のように述べている。

武藤山治という人がいましてね、実業界から時の政友会がね、腐敗堕落していると。これでは日本が幸せにならんと。だから我々実業人で政党を自らつくろうやないかと。それでね、私は皆さんにね、推されるんであればね、自分が党首になってやりましょうと、金も出しましょうと、いうて実業同志会というのができたんですわ。それは大正時代に、うん。……そいでね、一生懸命やらはった。僕ら

でも小さい町工場だったからな、それに参加してね、選挙運動やったんですよ。そしてね、七、八年たって得た党員はね、得た、つまり国会議員はね、六人ですわ。そしてね、その揚句の果てね、武藤さん殺された。で、解散ですわ。自然消滅ですわな。それから後に大阪の実業人はね、絶対に政治はあかんとなった。もう政治は政治やと、実業は実業でいこうということで、大阪の実業人は政治をタブーにしたわけですよ。[41]

幸之助は武藤が主導する政治運動に参加したようである。また、経営者としての武藤については一定の評価をしており、次のように述べている。

鐘紡は武藤さんがいた時の経営は、町工場と同じような意識の下にやっているのです。そこに鐘紡の繁栄があったのです。だから町工場より却って能率が上がったかも知れません。あれだけの資本と企業があって、町工場と同じような意識でありましたからね。……ああ大きくなったのは武藤さんだからできたので、武藤さん以外の人ではああいうものはできないのです。[42]

ここで幸之助が言おうとしていることは、前後で話の流れが変わってしまっているのではっきりとは分からない。

下村宏は武藤とも懇意にしていたようであり、武藤からの来書を紹介記事に載せている場合もある。[43]また昭和一二（一九三七）年三月一〇日、大阪国民会館において開催された武藤山治君追悼記念講演で、次のように話している。

武藤君は実業家として傑出した人であるが、然し兎に角桁のはづれた人で政治運動に志して、先程も云ふやうに『時事新報』で諤々の議論をつづけ、番町会の攻撃或は東京市政の改革に敢然として戦って来た。これ丈でも意義がある。更に幾多の著書を遺して居る。或は雑誌『公民講座』を続けて居る。乃ち武藤君の形骸は死んで居っても精神的には生きてゐます。更に此の国民会館と云ふ建物が出来て居て、此処で毎月一回武藤君を記念とする会が開かれ、又平日はこの会場が種々利用されて居る。かうして武藤君の遺した仕事に依り大阪の市民は絶えずいついつまでも恵まれて居る。武藤君が凶刃に斃れた事は誠に遺憾千万でありますが、しかし武藤君はとこしへに生きてゐる。

武藤君は関西で活躍して東京の舞台に飛び出て、さうして凶変で斃れた。然し武藤君の仕事がそれだけ遺って居ると云ふことにより、今私が「大大阪に求むるもの」と云ふ註文に対し、武藤君の形骸は亡くなっても、立派にその要求には応じて居るのであります。私は有難いことと思ふのであります。私はこの気持ちで武藤君の霊に衷心感謝の言葉を捧げ、諸君と共に故人の人格を偲ぶと同時に、大大阪と云ふものが唯頭数ばかり、人口ばかり殖えれば良いと云ふのでなく、質も向上しなければならぬと云ふことに、御同様今後とも努力をつづけてゆきたいと思ふのであります。[44]

また別なところでは、武藤がもし家で碁を打って遊んでいれば非難されることもなかったのに、社会の改善のため立ち上がったことは賞讃すべきだと述べている。[45]下村が武藤について述べるのは、実業家による社会や政治の改善がいかに重要であるかを論じている文脈が多く、この意味では、幸之助と下村において武藤のとらえ方はよく似ている。新政治経済運動において、武藤の運動をどのように参考にするのか、またどの点を反面教師とするべきなのか、両者が語り合ったこともあるかもしれない。

Ⅲ その他の人物

その他、佐々木信綱も注目すべき人物と言える。佐々木は昭和一八（一九四三）年、二一（一九四六）年と二回、松下電器の社歌の歌詞を作詞している。[46]直接松下幸之助と会ったかどうかは不明であるが、幸之助と関わりを持った人物と見なしてよいであろう。当時、万葉集研究の大家としてすでに高名であった佐々木に作詞を依頼することは、決して誰にでもできることではなかったはずだが、今回の調査で、幸之助が佐々木について直接言及しているケースは見当たらなかった。

下村宏と佐々木が交流を持ったきっかけは、下村の妻の文がもともと佐々木の弟子であったことである。[47]佐々木との初見はその直後であるが、本格的に弟子入りしたのは大正四（一九一五）年からであった。[48]

昭和七（一九三二）年六月二五日、華族会館において開かれた「佐々木信綱博士還暦祝賀会」において、下村は発起人総代として次のように述べた。

佐々木先生の還暦祝賀は少し他と趣を異にして居る。それは一は私の知る限りでは、佐々木家は先々代から今日まで歌道に志し国学に従事されたと云ふことである。利綱翁、徳綱翁、弘綱翁から先生に及んで居ることである。如何なる方面でも四代と同じ道に家門が栄えて行くと云ふことは極めて稀である。[49]

さらに佐々木の人柄について、次のように紹介している。

個人としての先生は要するに感じが穏かでやさしいと云ふことが誰しもうける印象であらうと思ふ。先生の声の調子はやさしい。態度もやさしい。見た顔は極めて柔和である。何とか菩薩とか云ふのでありませう。いかつい所と云ふものはない。さう云ふ点に就ては誰も認められて居る。或は又先生は極めてやさしいが、しかも公正な方で、立派な人格の方である。何処にも非難がない。明朗珠の如しと云ふことも、是も恐らくは万人の認むることであらう。[50]

当時の下村は兵庫県在住で、佐々木は東京府在住であった。大阪と佐々木の関わりについて、次のように述べている。

> 先生が大阪へ来られて社へ尋ねて来られる。さうして其の一二時間の間に、なにかと引っ切りなく注文を並べ立てられる。それから今度は是から何処其処の古本屋に行かなければならぬ。大阪には鴻池家を始め旧家が多くあります。さう云ふ所を尋ねて古書を探ねる。その写真を撮らなければならぬと云ふので、一日の行程はとても忙しい。よく大阪の竹柏会同人は、私なり川田君なりに、先生は大阪に度々来られるのであるから、竹柏会の者が寄って食事をしたり話をお聞きしたい、何とかしてくれと言ふ註文を聞く。しかし先生はそうした注文をきらふ。くたびれたから、おっくうだからと言ふのではない。是から誰其れの所を訪はねばならぬ、何処其処の本屋に行かなければならぬと云ふので、忙しいことをエンジョイして居られるのである。(51)

川田君とは、歌人で実業家の川田順のことであり、竹柏会は佐々木の弟子の集まりであった。佐々木は忙しく、直弟子であっても、なかなか会ってもらえないほどだったようである。

一方で、下村が佐々木の家に頻繁に出入りしていたことは、何度も確認できる。昭和二（一九二七）年には次のように書いている。

> 一月二十一日の夕まぐれ、本郷西片町椎の木のほとり、竹柏園主佐々木信綱博士の書斎に、火桶を圍みてしめやかに歌がたりに夜の更くるを知らぬ客がある。一人は直木燕洋、一人は筆者。(52)

直木燕洋とは、直木倫太郎のことであり、内務省の官僚である。大阪では直弟子と会う時間すらない佐々木が松下電器の社歌を作詞したのは、何より佐々木本人が気の置けない人だったことも大きいが、佐々木の還暦祝賀会発起人総代を務め、自宅にまでしばしば上がり込んでいた下村が橋渡しをした可能性も考えられるのではないか。

Ⅳ　今後の展望――幸之助研究における下村の重要性

東京朝日新聞の記事におけるもっとも古い「松下幸之助」の掲載例は、昭和九（一九三四）年九月二三日朝刊一三面である。関西大風水害（室戸台風）の被災者にさまざまな財界人が義捐金を出した際、幸之助も寄付者の一人として名があがっている。東京朝日新聞の経営を担っていた下村宏が松下電器を初めて取材したのは同年九月一七日であり、(53)幸之助が東京でも広く知られるようになったのは、昭和九年頃からと考えてよいであろう。

幸之助が実業家として雄飛してゆく過程において、東京でも少しずつ人脈を広げていったことは想像できる。しかし、幸之助の回想には一般的に次のような傾向があると思われる。

①松下幸之助は自分の事績に関して、昭和一〇年代の回想が比較的少ない

幸之助には『私の行き方 考え方』『道は明日に』『求　松下幸之助

経営回想録』『夢を育てる』などの自叙伝があるものの、『私の行き方考え方』は、三七歳の創業記念日以降についてわずかな記述しかなく、その他の自叙伝は老境に入ってからの回想である。幸之助が四〇代であった昭和一〇年代の事績は、どの書でも簡単に紹介されているのみである。この時期は関西以外にも人脈を広げていったと想像されるが、東京在住の佐々木信綱や平田家との関わりをあまり回想していないことはすでに論じた通りである。茶道を始めたのも、陽洲という号をつけたのも、自宅の光雲荘を建てたのもこの時期であるが[54]、どのように実業以外の分野にも活動の範囲を広げたのか比較的回想が少ないようである。

また、次のような傾向も指摘できるであろう。

②戦前において人脈を広げるには有力者の引き立てが不可欠であるが、松下幸之助はこれについて必ずしも詳しく述べていない[55]。

たとえば関西における和歌山県人会の中心であった栗本勇之助について、ほとんど回想を残していないことは先に述べた通りである。戦前において家柄や学歴のない人が社会で認められることは容易ではなく、また出身県による差別が厳しかったことは広く知られている。いかに能力や人物が優れていても、それだけで広く認められるほど戦前の社会は開かれておらず、幸之助といえども経営手腕と人柄だけで人脈を広げることは、戦後ならともかく、この時代では難しかったはずである。

家柄と学歴がない幸之助にとって一番有効活用できる人脈は和歌山県人脈だったと考えられる。後年は音無会を主宰して和歌山県人会の維持・発展に努めたことからも、幸之助が和歌山県人脈を大切にしていたことは間違いないであろう。

栗本と共に和歌山県人会の中心であった下村は、生涯において三〇〇人以上の人物の紹介記事を書いている。人脈はあらゆる分野に及び、およそ顔が利かなかった分野があったのかと思えるほどである。官僚時代から「八方美人」と言われ[56]、年末の挨拶状を一万通も書く下村は、当時において日本屈指と言ってよいほど広い人脈を持っていたことは間違いない。

この下村から幸之助は人となりを高く評価された。幸之助が、この下村人脈を有効に活用しなかったとは考えにくい。すでに確認したように、幸之助にとって重要な人物が、下村にとって非常に身近な人物である場合がいくつか確認できた。四〇歳頃には関西財界で一目置かれる存在になっていた幸之助が、その後全国各方面に人脈を広げていく過程で、下村人脈が生きた可能性が考えられる。

たとえば戦前において皇族に人脈があることは何かと有意義だったはずだが、下村には大正時代から、同級生の湯浅倉平を筆頭に、宮中に太いパイプがあった[57]。幸之助は下村と出会って後、昭和九（一九三四）年一一月、伏見宮博泰王より産業功労者として表彰され、松下電器は翌年一二月に東久邇宮稔彦王、昭和一四（一九三九）年四月に朝香宮鳩彦王の視察を受けている[58]。戦時中、松下電器に軍事協力を要請したのは大西瀧治郎であるが[59]、下村は大西やその周辺と懇意にしてい

た。[60] 下村は歌人であると同時に、媒妁であった石黒忠悳が茶人であったことから、茶道の造詣も深かった。[61] 幸之助は昭和一〇年代から茶道を始め、戦時中に陽洲という号を使い出したことは先に記した通りである。

また、当時においてスポーツの重要性はそれほど広く認識されておらず、オリンピックも一般には重視されていなかった。[62] 一方、下村自身は、郵便局の簡易保険創設に関与したことから、簡易保険局が創設した国民保険体操（通称ラジオ体操）にも造詣が深く、これをきっかけに体育の世界にも人脈を広げた。台湾時代には台湾体育協会会長となって積極的にスポーツを奨励し、[63] 後には大日本体育協会会長も務めて昭和一五（一九四〇）年の東京オリンピックを準備するなど、[64] 日本における体育界の指導者的役割を果たした。

戦前の東京オリンピックについて、幸之助は「松下のほうも何か技術の分野で参加というか協力したい――と考え、テレビ放送の実施を計画しました」と述べている。[65] 松下電器の運動会は、昭和一〇年代に入るとより大規模になり、昭和一六（一九四一）年の第一〇回体育大会は特に隆盛を極めたとされている。[66] この間、大日本体育協会会長は下村であったことから、ここにも両者の関係が見いだせるかもしれない。

幸之助は朝日新聞の飯島幡司と懇意にし、先に引用したように『PHP』誌刊行において朝日新聞を意識するところがあった。朝日新聞の人脈も、下村経由で生かすことは可能であった。

人脈は一般に証拠が残りにくく、証拠や言及がないからといって人脈がなかったとは限らない。しかし下村の記事は彼がどのような人物とどのような関係にあったのかを今日に伝えている。幸之助の周辺において、三〇〇人以上の紹介記事を書いた人物は他にいないのではないか。

下村は第一にその顔の広さから幸之助に人脈を提供し得た人物であり、第二に自分の人脈をしばしば書き残して、今日に証拠として伝えている。この二つの意味で、下村という人物は、幸之助研究においてキーマンであると言える。

本稿では、両者共通の知人について、それぞれがどのように述べているかを見てきた。なかには下村が幸之助に紹介したり、逸話を話したりしたのではないかと思える人物もいた。今後は、幸之助が下村人脈を生かした可能性についてさらに調査してゆきたい。

【注】

（1）坂本慎一「玉音放送に至るまでの下村宏の事績と思想――松下幸之助との交流と共に」『論叢　松下幸之助』第7号（PHP総合研究所）二〇〇七年四月。

（2）坂本慎一「松下幸之助と下村宏の道州制論――台湾総督府の州庁制と大戦末期における地方総監府制の重要性」『論叢　松下幸之助』第9号（PHP総合研究所）二〇〇八年四月。

（3）新政治経済運動における両者の交流は、坂本慎一「松下幸之助を日本中に紹介したジャーナリスト下村宏　第6回新政治経済運動」『PHPビジネスレビュー』第四八号（PHP総合研究所）二〇〇八年三・四月号参照。

（4）下村は戦前のラジオに多く出演しており、新聞雑誌にも多く寄稿

していた。本人は「僕の年末あいさつ状は約一萬通に及ぶ」（下村宏『持久戦時代』〔第一書房、一九四〇年〕三五二頁）と証言している。新年ではなく年末の挨拶状にしていたのは、郵便局長の経験から年賀状の仕分けや配達がいかに忙しいか知っていたからだという。

（5）当時において下村の紹介記事によって有名になった人物や出来事もある。たとえば日本国内における、明石元二郎の偉人伝の流布について下村の役割は大きい。下村は明石の葬儀委員長を務めて大々的に葬儀を行っただけではなく、これまで謎の多かった明石の事績を死の直後に紹介しており（台湾総督府発行『台湾時報』一九一九年一一月号、九～一九頁）、初期におけるもっとも詳しい明石の伝記である白石実三『明石将軍』（春陽堂、一九三三年）は「巻尾に」で下村を有力な情報源にしたことを明記している（同前三〇七頁）。その他、戦後において昭和天皇の「終戦の御聖断」を有名にするなど、下村が多くの「伝説」を流布した事実は間違いないであろう。

（6）松下幸之助『道は明日に』（毎日新聞社、一九七四年）二三二頁。

（7）松下幸之助『人事万華鏡』（PHP研究所、一九八八年）七三～四頁。

（8）下村宏『南船北馬』（四條書房、一九三二年）一二一～二頁。

（9）下村宏『皮と肉』（日本評論社、一九二七年）二〇四頁。

（10）兵庫県六甲山麓に住んでいたとき、近所の中村大四郎という子供の名は下村がつけたと述べている（前掲『皮と肉』四四二頁）。また、下村の部下であった石井光次郎は大正七（一九一八）年に下村の世話で結婚するが、当時四三歳の下村について「とても世話好きで、それまでにも四十数組の仲人をしていた」（『私の履歴書』第四五集〔日本経済新聞社、一九七二年〕四六頁）と述べている。

（11）下村宏『はきちがへ』（四條書房、一九三三年）八七頁。

（12）同前、八五～六頁。

（13）下村宏『五番茶』（博文館、一九二七年）一七九頁。

（14）その他、下村宏『南紀人材論』（紀伊毎日新聞社、一九一四年）二四三頁でも野村について言及している。書き方からは、この時点で面識があったかどうか分からないが、下村の方では野村の存在を意識していたことがうかがえる。

（15）松下幸之助「野村吉三郎さんを偲んで」『実業之世界』第六一巻第七号（実業之世界社、一九六四年）二六頁。

（16）松下幸之助・田川五郎『明日をひらく経営』（読売新聞社、一九八二年）二三頁。

（17）松永定一『新北浜盛衰記』（東洋経済新報社、一九七七年）二五〇～一頁。

（18）松下幸之助『北海道産業クラブ講演シリーズ 26 経済雑感』（北海道産業クラブ事務局発行、一九六五年）二頁。

（19）平野順次『泣き男』（株式会社栗本鉄工所、一九七九年）二頁。

（20）下村宏『我等の暮し方考え方』（池田書房、一九五三年）三〇〇頁、下村宏『盗忠』（日本評論社、一九三〇年）一一一～三頁など。

（21）下村宏『私の人生観』（池田書店、一九五三年）五四頁。

（22）前掲『盗忠』一九九～二〇〇頁。

（23）前掲『我等の暮し方考え方』三一六～七頁。

（24）名和太郎『松下幸之助「経営の神髄を語る」』（国際商業出版、一九八三年）九九頁。

（25）松下幸之助『折々の記――人生で出会った人たち』（PHP研究所、一九八三年）一二〇～一頁。

（26）松下幸之助『なぜ』（文藝春秋、一九六五年）一七九～八〇頁。

（27）下村宏『東亜の理想』（第一書房、一九三七年）三六〇頁。

(28) 同前、三六四～五頁。
(29) 同前、三六八～九頁。
(30) 同前、二六八頁。
(31) ＰＨＰ総合研究所研究本部「松下幸之助発言集」編纂室編『松下幸之助発言集』第二九巻（ＰＨＰ研究所、一九九二年）二二九～二三〇頁。
(32) 《速記録》第四七二四巻（ＰＨＰ総合研究所経営理念研究本部所蔵）「国際ＰＨＰ研究所発足のつどい」一九七二年、一四～六頁。
(33) 本多助太郎編『朝日新聞七十年小史』（朝日新聞社、一九四九年）一六六頁。
(34) 下村宏『通風筒』（四條書房、一九三四）二〇二頁。
(35) 同前、一九八頁。朝日新聞社史編纂室『村山龍平伝』（朝日新聞社、一九五三年）香雪翁懐古一三二頁にも掲載。
(36) 下村宏『下村宏博士大講演集』（大日本雄弁会講談社、一九二八年）扉の頁。
(37) 下村宏『歌集天地』（博文館、一九二九年）三四六頁。
(38) 同前、同頁。
(39) 下村宏『プリズム』（四條書房、一九三五年）二七四頁。同『一期一会』（人文書院、一九四二年）二〇頁。
(40) 前掲『通風筒』二〇一～二頁。
(41) 《速記録》第一四五九巻No.9・10（ＰＨＰ総合研究所経営理念研究本部所蔵）「ソニー盛田社長との対談」一九七五年、一〇七～一一一頁。
(42) 《旧速記録》第四二巻（ＰＨＰ総合研究所経営理念研究本部所蔵）「ＰＨＰの理念」一九四七年、一九二～四頁。
(43) 前掲『通風筒』二二六～八頁。
(44) 下村宏『動く日本』（第一書房、一九三九年）二四一～二頁。
(45) 前掲『下村宏博士大講演集』一九七頁。
(46) 松下電器産業株式会社発行『社史資料』No.3、一九六一年、二八～九頁。
(47) 下村は「僕の妻は古い古い竹柏会員である」（下村宏『芭蕉の葉陰』〔聚英閣、一九二一年〕一七二頁）とか「細君の結婚の際のふれ出しの一つは、佐々木先生の門に入り竹柏会の才媛であると云ふ事であった」（同前、一七八頁）と述べている。
(48) 佐々木との初見は赤坂演伎座で、明治三三（一九〇〇）年に結婚してから「その後間もなく」の頃であり（同前、一八一頁）、初めて歌の添削を求めたのは大正四（一九一五）年に入院した際、手持ちぶさたなので歌を詠み始めたことがきっかけである（同前、一七五頁）。
(49) 前掲『はきちがへ』五九～六〇頁。
(50) 同前、六二～三頁。
(51) 同前、六四～五頁。
(52) 下村宏『四番茶』（博文館、一九二七年）一八一頁。同じ文章が、前掲『歌集天地』序文一四頁、下村宏『歌集白雲集』（日本評論社、一九三四年）序文一八頁にも掲載されている。
(53) 前掲『プリズム』四頁。東京朝日新聞における「松下電器」のもっとも古い掲載例は、昭和一〇（一九三五）年一月三〇日朝刊四面である。
(54) 兵庫県西宮市に自宅を建てたことは、前掲『道は明日に』一〇二頁、陽洲という号については、同前一七七頁。このとき、幸之助は社長を引退しようと考えて号をつけたと証言している。茶道については、自宅を建てたときに茶室を造ったので、それをきっかけに茶道を始めたと述べている（『淡交タイムス』第三五号「私の茶歴　松下幸之助氏に聞く」一九六四年三面、サンケイ新聞大阪本社編『閑やないけど――或る財界人のひととき――』〔全国書房、一九六八年〕八～九頁）。しかしそもそもなぜ自宅に茶室

を造ろうとしたのか、詳しく述べているところは見当たらない。また、一説には田中車両株式会社の田中太介に初めて茶に呼ばれたのが茶との出会いであるとされているが、幸之助自身がそれを明言しているところは発見できなかった。

(55) 以上、二つの傾向がなぜ見られるのかは、今後の課題であるが、筆者による暫定的な推測は次の通りである。終戦後になると幸之助は荒廃した日本を目の当たりにし、公職追放や財産凍結など、公私共に苦痛を味わった。幸之助にとって、戦争による経済統制も確かに窮屈ではあったと予想されるが、戦後の方がより不自由だったはずである。つまり、終戦後の経験が非常に強烈だったため、その直前の時代は比較的記憶に残りにくかったのではないか。

(56) 台湾総督府発行『台湾時報』大正一〇（一九二一）年八月号、四九頁。

(57) 宮内大臣、内大臣を歴任した湯浅倉平については、前掲『私の人生観』五二～六〇頁、前掲『持久戦時代』三三九～四六頁。

(58) 松下電器産業株式会社編・発行『松下電器全製品型録 昭和一六年版』（一九四一年）I―五頁。

(59) 松下幸之助『仕事の夢 暮しの夢』（ＰＨＰ研究所、一九八六年）八四～五頁、前掲『道は明日に』一一一～三頁。

(60) 大西瀧治郎・海軍中将については、下村宏『日本はどうなる』（池田書店、一九五三年）六五～六頁、同『八・一五事件』（弘文堂、一九五〇年）六〇～四頁、同『終戦秘史』（講談社、一九八五年）二一四～九頁。また、大西を「神風特別攻撃隊の生みの親」とする解釈や、大西が終戦と共に切腹した逸話は、下村によって有名になった部分が大きいのではないか。

(61) 下村宏『趣味と青年』（潮文閣、一九四三年）一六九～九四頁。

(62) たとえばアムステルダムオリンピック陸上女子八〇〇メートルで銀メダルを獲得した人見絹枝は、昭和六（一九三一）年に満二四歳で死去したが、海外に比べて国内の関心は低く、下村は「人見絹枝の死は国内にはさして響かない」と書いている（前掲『南船北馬』一六一頁）。

(63) 台湾体育協会との関わりは、前掲『台湾時報』大正一〇（一九二一）年八月号、一〇六～七頁など。

(64) 下村本人によるオリンピック返上に関する記述は、下村宏『生活改善』（第一書房、一九三八年）二八～三二、六〇～三、九七～一〇九、一三三～六九頁。同『昭和の維新』（第一書房、一九四〇年）八九～九三頁。

(65) 前掲『道は明日に』一〇八頁。

(66) 幸之助は「昭和十六年の第十回体育大会のごときはその統制ぶりに、その間髪を入れない進行ぶりに、八万観衆を恍惚たらしめ、強い感銘を与えた」と述べている（松下幸之助『私の行き方 考え方』〔ＰＨＰ研究所、一九八六〕三〇八頁）。

（さかもと・しんいち　ＰＨＰ総合研究所経営理念研究本部松下理念研究部主任研究員）